

谷本さん、その後の御起居は如何でございますか。一寸もお音信がないが御病気ではありませんか。相変わらず信仰で煩悶していらるるのでしょうか。入信の順序を申し上げますからお聞き下さい。

人間は惑業苦の順に依つて三悪道を輪廻しているのです。惑とは迷いです。顛倒です。迷いが有るから身口意の三処から毎日毎時業を造り出すのです。迷いを根本として其の上に建てられた人間一切の動作は、一念一刹那一業と雖も罪悪でないものはないのです。かかる罪悪をかかえながら色々な計らうているのです。

一、凡夫の浅ましきには宗教を聞けば何とか成らねばならないと心得て、信心を要とすと言う金言を物足りなく思い、知らず知らずの間に報謝の行を信心に運び込む様に成りました。

二、信心とか安心とか言つて私の方で何か一つ纏つた物を得なければと力む様になりました。

三、また人様はあんなに喜ばれるのに私は何故あんなに喜ばれないのだろうかと喜び心を待つていた事もありません。

四、お寺でお説教を聞いている時には有難うて、そうだと安心ができています。家に帰れば気が済まないで、これではと心配していた時もありました。

五、喜びの出ている時には、こんなに喜べるから往生は間違いないと思つていますが、若し間違つて墮ちたらどうしよう。

六、此の薄紙の様な疑いが何故取去られないのであろうか。

と言う心配は私ばかりが通る経験ではなく、浄土真宗に流れを汲む人々は必ず出て来るのであります。谷本さん、こんなに考へている人は皆自力の臭みが残つています。他力によく似た自力であつて未だ本当に親心が知れていませんから、自分で心を繕うて往生しようと思つていますので、真剣に進まねばなりません。

一、宗教を聞き初めると漸次に色が付き次第に有難くなり、お説教が日々自分の胸に響いて感涙に咽び、之なら何時死んでも大丈夫である、人様は何故素直に聞かれぬのであろうか、只の只と仰るこの有難さと、何時も喜ばれて気持ちのよい信仰が永らく続きますが、凡夫の自体を真に見せ付けられて聞き抜いたのでないから 潮に満干が有る様に 若存若亡の心は浄尽されておられないのであります。無明自在の称名だから 破満の徳を得ていないから 真逆の場合に成れば 不安の雲に包まれるので、そこに疑わぬ様にしようと言ふ疑いがあるのです。之を覆い隠し往生し得る方へ自分を引上げたい思いから報謝の行を以て 往生の資助とまで明らかにはしないものの、決して任運随伴の行とはしません。お寺参りが出来る、他の人よりも聞かして貰っている、慎みがある、寄付が出来る、慈悲も深い、報謝も人並にさして戴けると、何か自分の長所を見て悪趣には沈まないであろうと、大決定の信心が不足であるから、報謝の行を往因に擬して自らを誤魔化している雑修雑善自力の心のやまない行者であります。

今少し深刻に進めば 自分自身の本當の値打が知れるので、観念を凝らしても如何に真実に成っても 成り切らない自分であり、誠が無いのが真の誠である事が知れるのであり、求むれば求める程自分の不実に泣かずはいられないのです。聖人様が「無始より已来今日今時に至る迄清浄の心なく真実の心なし」と仰せられた様に、表面は賢善精進を粧うていても内心には毒蛇悪龍が動き「凡夫のまことのこころとおぼしきは一念おこすに似たれども全く末とほらず」と寸分も誠はないのです。之が本當に飾らない持前の自性で 誰が何と言つても改める事の出来ない心であります。此の上に雑修雑善の城郭を廻らしても 無漏清浄の浄土には影のぞきも出来ないのです。

二、信心を獲よと教えられるのだから、安心、信心が獲たいと思ふのは尤もでございしますが、教える人が生命懸けで求めた覚えが無く、苦の抜けた覚えが無く空虚な心を 他力の信仰の様に思つて教えられるのなら、聞く人の方が迷惑します。水際を聞け ぐ と言いなから 肝腎な水際は言わないで人をチャームさしたのを信仰の様に思つていられるけれども 権実

真仮の水際を立てて 自他二方の分際を詳かにして教えなくては、自他共に五里霧中の信仰で 真の妙味は得られないので
す。自力の信心を通らなければ、他力不思議の信仰に入る事は出来ません。 他力の信は あんなに仰るからこう信ずればよ

いと言う自分の胸算用で出来る様な小さい信心ではなく、廣大難思の慶心、不可称不可説不可思議の言葉も心も絶えた信仰で、
この信は如来の真心であります。 故に「信心をばまことの心と読む上は凡夫の迷心に非ず全く信心なり。この信心を授け給

ふ時信心とは言はるるなり」と申されて如来より廻向されて初めて他力の信と言わるるのです。 而も苦の抜けた他力不思議

の体験者は甚だ尠く、他力の中の自力の人は十中の八九はいるのですから、調熟の光明と攝取の光明とを一緒にして、それを
他力の信仰の様に心得ているのですから、真の大自然を獲る迄は進まなければなりません。

三、人様と較べて喜べるからとか、御報謝が出来るからとか言う事に腰を据えたり、出来ないからと不安に思うのは 総て
他力によく似た自力であります。 何故なれば口の先では墮ちる者と言いながら 墮ちた覚えがないから助かった自覚がない

のです。 自覚がないから手元が暗い。 暗いから他人と較べて淋しいから信者らしく粧わなければならぬのです。 本當に
三定死の思いで求めて御覧なさい。 他人と比較する余地も無ければ、他人の脚下を見る暇もありません。 無始より迷い

来った自分の醜さ、三悪の火坑に向って走りつつある恐ろしさ、財産家族は多くとも真に曠空の沢の辺を歩みつつある淋しさ、
反省すればする程、脚腰立たぬ、是非善悪を知り切らない悪魔であると驚かされた時、かかる機までも救い給うは 大慈大悲

の親様でありましたかと、絶対の信順、無疑無慮乗彼願力定得往生の大安心は獲られ、喜べるとか喜べないとかを超越して、
喜ばずにはいられない心多歡喜の益を得て行住坐臥に仏様と感応し得るのであります。

四、此の心も前の三と同様に弘願の信樂に達した人ではなく、通り一遍のお領解だから未が通らないのです。 真実の親に
無条件で許された自覚が無いから 法に遠ざかれば不安が起るのは当然です。 不安は取りも直さず疑いです。 疑いが出た

のは晴れる源ですから 私は大いに喜びます。 疑われない人は氣に掛らない人だから求める人ではありません。 求め抜いてこ

そ、疑い抜いてこそ、疑う余地なく往生は一定なりと言う金剛心は得らるるのです。然るに疑うた事のない人達の前に苦し
い胸を抱いて求道に燃えて深刻に求むれば、聞き方が足りないと言に揉み消し 合点したのをよい同行の様に讃めているが、
能所何れが聞き方が足りないかは疑問であります。何となれば普通の求道者は一通りの学問をし、理屈が判つて時々念仏を称
えて報謝をすれば 他力の信仰の様に思っているけれども、熱心な求道者の方は机上の空論ではなく、畳の上の水練でなく、
実地に求め抜こうとするのですから疑わずにはいられないのです。疑つて後自己の醜さも知れ、晴れて後法の尊さも仰がれる
のです。寺に参つた時と家にいる時との信仰に格別の有るのは他所行きのお化粧の信仰であつて 徹底した他力不思議の
信仰ではありません。

五、感情に執われ易い私、涙に誤魔化され易い私は、現在に燃えつつ業火に攻められている事に気が付かず、未来の往生を
夢見つつ涙を流して之で往生は一定だと喜んだ事が幾度有ったか知らないが、熱の醒めた時は物足りない。仏様の仰せに間違
いは無いのだから 誰が何と申されたつて大丈夫だと言いつつ切っていました。私の真実の機をお留守にして聞いていたのです
から、真の決定心は無く空威張りで自分免許で参れる積りでいたのです。今から考えて見れば自分を誤魔化し、同行知識を欺
し、仏様まで盲目にしていたのです。之が若存若亡の親玉です。自分を知らない間抜けの信仰です。ひよつと墮ちはせぬか
と言う他人事の信機じゃもの 助かるだろうと言う他人事の信法は無理のない事です。機を見ても決定必定、法を見ても決定
必定でなければ「行者正受金剛心」とは申されません。然るに世の中には「凡夫にははつきりした事はない」とか「凡夫に
は決定心の無いのが決定心」とか言いますが、何ともかんとも判らない、槍つ放しを他力の様に言わゆる方が有るけれども、
それはお聖教も知らなければ体験も無い哀れな信仰の真似をしているのです。親の真心が徹底した時私の金剛心となるのです。
お互いに真剣に進みましょう。

六、薄紙の有る事に気の付く時は自力を捨てて他力に乗托しようとする時であつて、前の五の自分の醜さを知らない皮相な

信仰であるに對して、今は眞実の自分を見詰めた時に驚く心ですから、明らかに進んでいきます。今迄他力の中の自力に誤

魔化されていて他力不思議の信仰で無かつたと言う事に気が付いて、一大事であると眞劍に成つた時でなければ、この心の曇りの薄紙は知れません。だから出来ない人は出来ないものであつて出る迄聞いて晴れる迄聞かねばなりません。

谷本君、いや弟よ、他力の信仰程難しいものは有りません。撰取された上はまた此れ程易い尊い広い深いものは有りません。

自惚れ強い私は他力の信仰を丸呑みにして、自分が雑修の桁に腰を据えている事も知らないで、進み行く人を嗤うていました。が、歩まなければ進まれません。求めなければ獲られません。罪の深さを知らなければ御恩の尊さが判りません。逆謗の

屍を照らされなければ、五兆の願行の生血を飲まされた味がわかりません。現在に死に切らなければ、現在に生かされきれません。絶対不二の境地は絶対不二の機に泣いた人でなければ判りません。共に進みましよう、無碍の一道を二

西方の阿弥陀如来様は、罪を如何程深くとも我を一心にたのまん衆生をば必ず救うべしと仰せられてありますが、罪は罪とも、業は業とも、墮ちるを墮ちるとも知り切らない程の麻痺し切つた私には、闇夜に鉄砲、馬の耳に風で、罪は無いとは思

われないけれども、必墮無間に驚かないから、必ず救うべしと仰せらるる勅命が、私一人であると響かないのであります。本當に切詰めて見れば、久遠の昔から今日今時まで一切の三宝を破滅し、一切の父母知識に反逆し、一切の有情を殺戮して

いる業障の恐ろしさ、高峰岳山にも勝る苦惱の心、十方世界をも覆い包む散乱放逸の心、何処迄罪が深いか、何処に自分の眞実が有るかと究れば究る程、思ひの儘に成らない平氣な心に泣かされ、泣くかと思えば怒り、怒るかと思えば欲に走り、

自分で自分が判らない、言い表す事の出来ない心、而も現に逆謗を侵している、自縛に自縛せられて一秒一秒無間のどん底に飛び込みつつ、息づまる罪惡觀に満たされている時は、(一)報謝の行を山程積んでも生死の苦海を埋める事は出来ません。(二)

信心はこうだ、安心はこう戴いたらよいのだと言う型を覚えていたので、八万の法蔵を知つていても役には立ちません。(三)人の喜ぶるとか喜べないとか他所の心配まで出来るものか。現に自家が焼けているのに他所の普請が見ていられるもので

はありません。(四)寺では喜べるけれども、家では心の波が騒いで信心が失せると言う、丸で人の噂をしている様な話では通
りません。(五)間違うて墮ちたらとは大菩薩の言う事で、真剣に成れば成る程間違ひ無く墮ちると言う真実の自性を見せ付け
られて驚かすにはいられません。(六)もう一寸聞けば此の薄紙は取消されるであらうと思つて進んだけれども、心全体が疑
雲に閉ざされてしまつて二進も三進も動かれないのです。丁度崩れかけた土手の上で地団駄踏む様に、踏めば踏む程藻掻け
ば藻掻く程、崩れる放逸の心に泣かされているから。(一)(二)(三)(四)(五)(六)の聞き方はよい加減な誤魔化しであつた事に驚くのです。
愈々之から先は理屈でも道理でも進まれない。真実の如来の声なき声を、言う事聞かない機が聞き開かなければならないのだ
から、唯々真剣で進めと言うより他には仕方がありません。

弟よ二 息づまる自分の悩ましさを痛感すればする程 一秒時間も纏まりの無い真実の無い自分に呆れずにはい
られません。この愚痴無知の無明を中心に三毒五欲の渦を巻かし八万四千の怒濤が狂うているのだから、朝から晩まで狂いに
狂うて清浄の心は微塵もありません。現に生死の苦海の只中で怒濤に弄ばれ溺れつつある私が、墮ちる者をお助けと素直に
思ひ込んで戴いていますとか、死にさえすれば往生とか、そんな夢が見ていられるものですか。臨終は今ではないか、今の心
を今満足さして下さらなかつたら、今が火の車ではないか、今現に自身が業火に燃やされつつあるではないか、此の散り乱れ
る心を乱れる儘で救うて下さらなかつたら往生の間に合いません！ 念仏は極楽に参るのやら地獄に墮ちるのやら！ 仮令え
すかされ欺されても地獄は一定住家ぞかし二 と言う真実の自分を照し盡された時の恐ろしさ二 (此の最後の妙味は感じた
のでもいけなければ、知つたのでも覚えたのでも、人真似なれば尚いけな) 只々この真実の機を貫く、焰の中から叫び上
げる、法龍其の儘ぞ二の親心に苦惱の心は晴れ渡り、親様只と言えは此の儘でございましたかと、機に呆れた私は法の絶対
に呆れずにはおれなかつたのです。私の本形をはたらかさずして生まるべからざる者を生れさせたればこそ 超世の本願と
も言い 横超の直道とも言うのであつた。私のこのまんま、罪を抱えて墮ちるなり、愚痴の零れる其のなりが本願のお目当

てであつて、行いを慎み、心を素直にして、罪を造らない様にして往生さして戴くのではなかつた。仏の本願に信順すると
言うのは仰せに従うのであつて、十方法界に満ちている罪業を其の儘撰取して 功德大宝海と一味平等に成つてくれよと 念
じて下さるにも関わらず 私の方で慎まれるの喜ばれるのと自力を働かせば、信順する様であつて而も本願を傷付けているの
でした。本師法皇の親様は、不可思議兆載永劫の修行に依つて私の煩惱を退治する為に功德の宝海を六字に成就して、十劫
已来叫び続けていて下さつていたのでした。然るに私は自分の業報に驚いた事も無ければ真実の法を真剣に求めた事も無く、
偶々聞く事を得ても自力の執心に狂わされてこんなな腹が立つ様では、こんなな欲が有る様ではこんなな慎みが出来ない様で
はと慎む振りをして親の大願業力を疑つていたのでした。

おーい可愛い一人子よ 何を愚図くしているのか。抑々迷いの初めからお前の心は三毒の煩惱より他にない。行を言
えば 十悪五逆より他に出来ない徒ら者と見貫いていゝぞ。若しも三毒五欲を止めて来てくれたなら 私は本願を建立し代
えなければならぬから、罪を抱えて泣くなりて助かつておくれよ 二

親様私も助かりとうて任せとうてなりません。私の心はぐらくして一寸も心の自由がききません。お前は今其の心に氣
が付いたのであろうけれども 私はそなたが三悪道を迷うている時から見貫いていゝのです。それでも身口意の行いが慎まれ
ません。慎んで来いと誰が言うたか、身口意の乱るるを目出度なして往生せんとするは自力なりと言つてあるではないか。
それでも何とも成れません。何とも成れないからこそ 其の儘が本願に契うていゝのであるぞ。それなら泣くく墮ちる此の
儘でございましたか。

嗚呼 南無阿彌陀仏、くどうにもこうにも成れない此の儘が 本願の勅命通りに成れたとは不思議の本願でございました。
無明業障の重罪を荷うて泣いた私、善を言えば塵ばかりも無い、悪を言えば煩惱具足、唯知作悪、三毒五欲、逆謗闡提の火
の車の有りの儘が 十八願に許された正客とは恐ろしい偉大な本願ではありませんか。

願力無窮にまませば

罪業深重重からず

仏智無辺にまませば

散乱放逸も捨てられず

唯々不思議くと言うより他にはありません。この私の動いている心の通りに動いていて下さるのが本願の念力でございま

した。静かに眺めて唯々泣くより他に道の絶えた（信機）私の心のなりが選択本願の念力に契っていたのであった（信

法）とは何と広大な慈悲でございましょう。

米一さん、私は泣きました。自分の始末の付かない心に泣きました。往生の望みの綱の切れた時、即得往生住

不退転、意も言葉も絶え果てた無辺のお慈悲に踊り上がって喜びました。他力の信心とは何と不思議ではありませんか。貪

瞋煩惱の狂うている只中に親の誠の届いた時は往生と正覚と同時に成就した信樂開発の一刹那でありました。これは皆仏様

の念力、名号不思議の力の為さしめ給う処で、もとより凡夫の計らいではありません。親を泣かした私が真実の一人子であつ

たとは呆れ果てた本願でございました。慎まずにはいられません。身を粉にしても此の鴻恩に報いずにはいられません。共に

進みましよう 無碍の一道を、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。